

二 次の文章は、平重盛について書かれたものである。これを読んで、問一～五に答えなさい。(配点四〇点)

天性てんせいこの大臣おとどは不思議の人にて、未来のことをも、かねてさとりたまひけるにや、去んぬる四月七日の夢に見たまひけるこそ不思議なれ。たとへば、いづくとも知らぬ浜路はまぢをはるばると歩み行きたまふほどに、道の傍らに大きな鳥居のありけるを、「あれはいかなる鳥居やらん」と問ひたまへば、「春日大明神かすがの御鳥居なり」と申す。人多く群集したり。その中に法師の首を一つ差し上げたり。「さてあの首はいかに」と問ひたまへば、「これは平家太政入道殿、悪行超過したまへるによつて、当社大明神の召し捕らせたまひて候」と申すと覚えて、夢うちさめ、「当家は保元・平治よりこのかた、度々どぞの朝敵を平らげて、勳賞けんじやう身に余り、かたじけなく一天の君の御外戚ぐわいせきとして、一族の昇進六十余人、二十余年のこのかたは、楽しみ榮え、申すはかりもなかりつるに、入道の悪行超過せるによつて、一門の運命すでに尽きんずるにこそ」と、来し方行く末のことどもおぼしめし続けて、御涙にむせばせたまふ。

をりふし、妻戸をほとほと打ちたたく。「誰ぞ。あれ聞け」とのたまへば、「瀬尾太郎兼康せのそが参つて候」と申す。「いかに、何事ぞ」とのたまへば、「ただ今不思議のこと候ひて、夜の明け候はんが遅う覚え候ふ間、申さんがために参つて候。」^①御前の人をのけられ候へ」と申しければ、大臣、人をはるかにのけて、御対面あり。さて兼康見たりける夢のやうを、始めより終はりまで詳しく語り申し **a** が、大臣の御覧じたりける御夢に少しもたがはず。さてこそ、瀬尾太郎兼康をば、神にも通じたるものにてありけりと、大臣も感じたまひけれ。

その朝、嫡子あした権亮少将維盛ちやくししんのすけせうしやうこれもり、院の御所へ参らんとて出でさせたまひたりけるを、大臣呼び奉りて、「人の親の身として、かやうのことを申せば、きはめてをこがましけれども、御辺ごへんは、人の子どもの中には優れて見えたまふなり。但しこの世の中の有り様、いかがあらむずらんと、心細うこそ覚ゆれ。貞能さだよしはないか。少将に酒勧めよ」とのたまへば、貞能御酌に参りたり。「この杯さかづきをば、まづ少将にこそ取らせなければども、^②親より先にはよも飲みたまはじなれば、重盛まづ取り上げて、少将にささん」とて、三度受けて、少将にぞさされ **b**。少将また三度受けたまふとき、「いかに貞能、^(B)引出物ひきでものせよ」とのたまへば、かし

こまつて承り、錦の袋に入れたる御太刀を取り出だす。「あはれ、これは家に伝はれる小鳥といふ太刀やらん」など、よにうれしげに思ひて見たまふところに、さはなくして、大臣葬のとき用ゐる無文の太刀にてぞありける。その時少将けしき変はつて、よにいまはしげに見たまひければ、大臣涙をはらはらと流して、「いかに少将、それは貞能がとがにもあらず。そのゆゑはいかにといふに、この太刀は大臣葬のとき用ゐる無文の太刀なり。入道いかにもおはせんとき、重盛がはいて供せんとして持ちたりつれども、今は重盛、入道殿に先立ち奉らんずれば、御辺に奉るなり」とぞのたまひける。少将これを聞きたまひて、とかくの返事にも及ばず、涙にむせびうつぶして、その日は出仕もしたまはず、引きかづきてぞふしたまふ。その後大臣熊野へ参り、下向して病つき、幾ほどもなくして、つひに失せたまひけるにこそ、げにもと思ひ知られ

c

（『平家物語』より）

〔注〕 ○この大臣——平重盛のこと。

○春日大明神——現在の奈良市にある春日大社。

○平家太政入道——平清盛。重盛の父。

○一天の君——天皇の尊称。

○妻戸——出入り口の両開きの戸。

○瀬尾太郎兼康——清盛に仕え、活躍した武士。

○御辺——代名詞。そなた。

○貞能——平貞能。重盛に仕えた。

○無文——蒔絵や彫刻などの装飾が施されていないこと。

問一 傍線部①～④を現代語訳しなさい。③は、具体的な内容を明らかにすること。

問二 傍線部(A)「御涙にむせばせたまふ」について、その理由を五〇字以内で説明しなさい。

問三 傍線部(B)「引出物」について、

- (1) その中身は何であったか、本文中から五字程度で抜き出しなさい。
- (2) これに込められた重盛の意図を、六〇字以内で説明しなさい。

問四 空欄a～cには、助動詞「けり」が入る。適切な活用形に直して答えなさい。

問五 『平家物語』と同じジャンルの文学作品を、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

イ 『海道記』

ロ 『源氏物語』

ハ 『国性爺合戦』

ニ 『太平記』

ホ 『徒然草』